

---

# イーターデリーター

零夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イーターデリーター

### 【Nコード】

N2242Z

### 【作者名】

零夜

### 【あらすじ】

平成26年、2014年、12月27日、イーターサイエンティスト事件。以降、この世界は、1イーター（人を食らう者）に、占領寸前、

そんな時に、イーターを殺すもの、イーターデリーター計画、

目的は、この世界から、全ての、イーターおよびイーターサイエンティストを消す事、主人公は、ある校舎に来ていた。そして、インカムに連絡が

入る！！

**援護要請（前書き）**

イーターそれは、人を食らう者、

それを消すもの、イーターデリータ、

グロ、ホラー、ハプニング、SF、アクション！！

## 援護要請。

「くそっ！！何でだ？なぜ？この学校にイーター達が！！」  
俺は、ある校舎に居た。その校舎には、もうイーター達が現れた。  
まず。名前からだ。俺の名前は、デイル フェイス イザエル。  
イーターデリーターの一人だ。  
因みに、イーターは、食らう者。俺たちイーターデリーターだけで  
なく。

人間は、全員こいつらの餌だ。俺たちの任務は、この世界から、イ  
ーターを消滅させるのが目的、  
そう。平成26年、12月27日、2014年、午後2時22分、  
イーターサイエンティスト事件、  
サイエンティスト達が。イーターへ改造する人体実験を行っていた  
らしく・・・

26年、冬、そいつらは、世にばら撒かれた。俺の友達や親や弟、  
兄、その他色々・・・  
イーターのせいだ。失う。その夜俺は、必死に逃げていた。人を食  
らう者から、  
そして、疲れ果て、もう駄目かと思うと。目の前にヘリが着陸、  
そして、俺は、イーターデリーターになった。

俺は、全ての戦闘における訓練をされ、武装させられ。今では、イ  
ーターをデリートしている  
もうこれ以上人が食われるのは、見たくない。グロイから。  
そして、俺に与えられた。ファーストミッション・・・それは、  
色々な世界を回り。生存者を集め。デリーターに仕立て上げること。  
これが任務。  
気が進まないがな・・・そして、今俺は、とある校舎の中で生存者探  
し。

「ちっ・・・おらぁ！！！」

俺の今の装備は、イーターソード。イーターを殺すために開発された。剣、

これを使い。イーターをなぎ払う。

「あぶねっ!!」

ぎりぎりかわし壁にキックし。

敵の顔面を切り裂く。

「切れる!」

ザシユッ...

「くそまだ来るか。」

そんな時、インカムごしに連絡が入る

「大丈夫ですか?」

「お前...誰だ?」

「私は、ファイルス ファイレイナ エイールです。コードナンバーは、777...」

コードナンバーそれは、強さを表すもので。真ん中に7や8、9と言った数字が入っていれば。

強い。5、4、2と言った数字は、普通と言うこと。

イーター同士が挨拶および、「私は、あなたと手を組みます。」と言う合図にもなる。

「トリプルセブン...Sクラス。俺は、イザエル、デイル フェイス イザエル。トリプルセブンが、

俺なんかと、協力するのか?」

「今は、人手がたりません...至急。ルートAS、1階。体育館まで、援護を要請します。」

「了解...ルートAS、1階、ポイントFの体育館まで、コールだな?」

「はい。では、」

「さてと、こいつら片付けて、さっさと行くか!!エメラルダイト...頼むぞ。」

俺の使っている。剣は、エメラルダイト。そこそこの耐久性と攻撃

クラス。F程度の武器だが、  
使い方によって、変わってくる。

「おいおい困むって．．やる気まんまんだな？けどな！！」

俺は、消える。正確には、上に張り付く。そして、

「さて、スモーク！！」

スモークの白い煙が奴らをまく。

「スモークの限界時間は、わずか。15分、いけるか？フッ！！」  
俺は、下に降り。全速力で走りながら、イーターを切る。

「一本じゃ間に合わないな！！エメラルドコピー。」

これを使うと、エメラルドダイトの剣が。二本になる。

そして、精神を集中し、頭の中をしるに、無心になる。すると、イーターデリーターには、アップドアタックと言う技がある。全ての力を剣に集中し、力を剣にねじ込む。

すると、エメラルドの輝きをし。スピード、力、冷静、デリーターの持ちえる全てのスコアを急激に上昇

そのスコアの数だけ、スキルに変換し力にすること、つまり強化しながら殺れる。因みにデリーターは、皆

ダイト物、鉱石物、宝石物、のついた。武器を持つ。トリプルセブ  
ンになると。全ての原石、鉱石、

宝石、真珠、ダイトの力を、自分の持つてる力に。アップドコピー  
可能だ。単純に、自分の力にすることができそうだ。「あと．．

3

「ふうっと、アップドダウン。15分ぴったりか。じゃあ行くか」

「まだこないのですね．．」

## ボスイーター（前書き）

前回、イーターどもをボコボコにしてた俺に、  
通信、援護要請らしい。それが下の階の体育館とは、寿命が縮む・  
仕方なく行く事にする。

## ボスイーター

「おいおい、下の階って。こんなに遠いのか？」

「どれだけ、イーター居るんだ．．俺が逆に食われる。」

「とか思いながら俺は、階段よりも、エレベーターを使う。」

「よくあるんだよな．．下に到着した時、ドアが開く瞬間」

チーンと音を立て、ドアが開く。

「予想どおり．．だな。」

開いた瞬間にだ。目の前には、5体．．

「この数なら．．これでいいだろ。」

俺は、腰についているアックス分散手榴弾をとりだし。投げる。

これは、投げた瞬間に、斧が分散し、目的に向かって、飛んでく。

「すごい威力だな．．周りのイーターが全滅した。」

「数が多い．．私でも適うかな．．」

私は、数の多い敵に悪戦苦闘．．

一人では、きつい。

「こちら、イザエル。生きてるか？」

「応答．．生きてます。」

「だったら。お片づけだ」

「わかりました．．ルビーコピー．．アップド アタック．．開放」

「エメラルドコピー。アップドアタック開放」

「行きます」

「行くぞ．．はあああ！！！」

俺と、女イーターデリーターは、イーターどもを片付けていた。

「ちっ．．相手も早いですね。」

「そりゃな。相手も俺達を食らいたい訳だから。おそらく．．お前を食らうのは、俺だ」

「今は、やめてください．．戦闘中に照れます．．」

「可愛い奴だな．．」

「．．．」

「冗談はさて置き、行くか!」

「はい。」

「おらっこっちだ!!」

「遅いです．．」

イーターを一頻り片付けた。

すると．．倉庫から、なにやら、でかい奴の姿が見える。

「なんだ．．あいつ」

「このボスイーターです．．私の任務は、ボスイーターを片付けることです。」

お手伝い願いますか?」

「当たり前だ．．」

「ボスイーター．．ダイトバインズ。特殊能力は、デリーターのダイトを破壊することです。気をつけてください」

「了解っおっと、!!」

バインズが俺に向かって、棍棒を振り下ろす。

俺は、それを、剣で受け止める

「くっ．．欠けたか。こいつは、怖いな。復元．．」

「ていああ!!」

ファイレynaが槍で相手の胴体を突き刺す。

「今です．．」

「サンキュウ。さあ．．これで終わりだ!!」

俺は、ボスの頭を、突き刺し。心臓を、M4H A Uで撃ちまくる

「片付いた．．ん?あれは、?」

「強化石です。この時だけ、イーター同士で、取り合いです。勝負です!!」

「ブラックスモーク!!」

「えっ?何も見えない?」

「これが強化石だな。」

「随分・ずるい手を使うんですね。」

「勝負なんだろ？それぐらいするさ。」

「さすがです。」

「さて・現地C A L Lポイント、Fの体育館、至急回収を要請、本部聞こえますか？」

「本部C A L L。了解、回収に向かいます。そこの子も一緒にね？」

「私は、別に」

「そう言うな。ほら」

俺は、手を貸す。

「えっ・・良いんですか？私を・・」

「同じ、デリータの仲間だから。」

「ありがとうございます。」

## ポスイーター（後書き）

任務完了・・・

ポスイーターは、強かった。

そして、新たな仲間を一人、拾う。

次の任務へ向かうのだ。

## フィレイナの秘密。(前書き)

俺は、ディルフェイスイザエル。  
イーターデリーター(ルーキー)  
前回の戦いで、一人の女を拾った俺は、  
そのまま基地までお持ち帰り。  
一人は、さすがに危険だからな．．

## フィレイナの秘密。

俺は、あの後、めでたくヘリが来て、回収され。到着！ここまでがいいが．．

問題は、上司だ。デリーターは、イーターを殺した後、すぐに任務完了報告をする。

それも．．あの頭の固すぎる。上級の奴にだ。

「デリート完了しました」

「ふつ、こんな物、消せて当然だ。その女は、誰だ？」

「現地で拾いました。」

「フィレイナです。よろしくお願いします．．」

「こんな奴を連れてくるとは、まずこの弱そうな女を片付ける。ルキー」

「そんな言い方ない。彼女だって、危険だったんだ。そこを助けたんだ。」

「口答えか。ずいぶんでかくなつたな！！その態度を改める」

「上官こそ、言葉を選ばないと、そのうち逃げられますよ？」

「うるさい．．報告がすんだならばらく休息だ。勝手にどこへでも行け」

と言って．．上司は、ドアを閉める。

ドアを閉めるその音は、まるで俺達をさげすむような感じで、かなり俺をいらつかせた。

まったく．．愛想のない人だ．．

「悪い．．ああ言う奴で、」

「いいです．．気にしてませんから。それより本屋にいきませんか？」

「本屋？欲しい本でも？」

「そうです。」

俺は、近くのワンダーブックへ、フィレイナと行った。

「着きましたね」

「そっだな．．．」

「まずは

、あっちです」

俺は、つままれるようにして連れて行かれる

「おいおい、そんなに急ぐなよ」

「早く読みたいんです」

本屋にいる時のフィレイナは、すごく楽しそうだった。

笑顔を始めて見た気がする。

「見つけた．．．この本」

「なんだそれ．．．えつと．．．夜のテク？」

「この本が面白いんです。」

内容がどんなのか知らないようだ。

しかも、ここは、R-18部屋、置いてある本の内容はほぼ．．．アダルトイ。

俺は、とんでもない場所に来てしまったようだ．．．

「お前．．．それ。どんな内容の本なのか．．．分かってる？」

「分かりませんけど？」

きよとんとした様に言うフィレイナ．．．

この子。大丈夫なのか．．．

せつかくだからどんな内容だが教えてやると

「えつと．．．その．．．こんな。内容だったなんて。その。私、知らなくて、

でも興味あつて．．．／／」

「はあ．．．とりあえずここから出よう．．．」

「ですね。買って行きます」

「いや．．．買うなよ．．．」

「本は、人の趣味です。文句を言う権利は、あなたにはありません」

「じゃあ．．．フィレイナは、こう言うのが趣味か？」

「そんなこと．．．あります！もう買いません！！」

そしていい時間になって。

そろそろ帰ろうかと．．外に出た。

そして、

「今日は、楽しかったですね」

「そうだな．．」

「楽しかったですね」と振るその手には、しっかりとあの本が握られていたのは、

スルーだ。

スルースキルをまさかこんな事に使うとは．．

無駄遣いにもほどがある．．

そんな所に不幸の電話．．

「もしもし？」「私だ。次の任務だ。ロゼンゼリテイレウインスで。助けを求めているデリーターがいる

助けにけ．．以上」

「ロゼンゼリテイレウインスといえば．．あの不思議な力を新たに目覚めさせる者もいるという．．

伝説の場所ですね」

「よくしってるな」

「今、携帯で調べました。」

「え．．」

「私、結構詳しいので

にしても、あそこでイーターですか」

「華麗にスルーしないでください．．携帯で調べたのに詳しいと言えるのですか？」

「．．．．」

「．．．．」

「と、とにかく行きましようー!!」  
つづく

フレイナの秘密。(後書き)

新たな任務が飛び込む．．  
それは、あの伝説の地での任務。

ロゼンゼリティレウインス。 前 (前書き)

俺は、デイル フェイス イザエル。本屋の帰りに、俺の黒の携帯に不幸の電話が入る。

## ロゼンゼリティレウインス。 前。

俺達は、あの電話の後、一旦 本部へ戻る。  
そして、作戦内容を説明される。そして・・・  
新たなる敵の存在、俺達は、知ることになる。

「お前ら、ルーキの力を見せてくれ。」

上官は、言葉では、そう言っておいても。  
実際には、そうは、思っていないようだ。  
目つきで分かる。

上官は、そんな優しい事を言うような人では、ない。

「今回は、イーターデリートと共に。

こいつも殺れ。」

誰が撮ったのか一枚の写真を見せられる。

俺は、それが誰なのか尋ねる。

「これ。誰だ？」

「デブレイズブランドル。ブラックダイヤモンドの力の所有者です  
ね？」

「そうだ。全てが謎に包まれていると言うこの人物、強さは、半端  
じゃないらしいからな」

良く知っているなと思った。俺には、戦闘の技術こそ本物だが。  
敵の情報は、一切与えられたことがない。

「どうやって・・・」

「では、頼んだぞ？」

「はい」

「はあ・・・分かったよ。無愛想なボスさん」

「お前・・・名前で呼ばないか？」

「名前、知らないもん。」

「私の名前は、デイズ デイバ デイレーン」

「了解、デイレーン。じゃあな」

そして、無愛想なその巨体と云っていいほど、でかい。デイレーンは、

ドアを開け、奥に戻る。

今度の音は、普通だった。

そして、デイレーンの居なくなったこの部屋には、静かな空気が漂う。

まるで、これから行く場所の危険さを無理やり叩き込まれるような不気味な静けさだった。

「武装準備に入るので．．失礼します」

「ああ。」

ロゼンゼリテレウインス。 前。(後書き)

ついに、次の場所が決定する。

その場所には、かなりの危険があるらしいが・

俺は、大丈夫なのか？

**最終章。 ロゼンゼリ テイレウインス 続 (前書き)**

俺は、デイル フェイス イザエル。

いよいよ。ロゼンゼリ テイレウインスについた。

そこで、まさかこんな事になるなんて。

本部の目的は、どうやらこれだったらしい。

## 最終章。 ロゼンゼリ ティレウインス 続。

「デイレーン様．．．そろそろいいんじゃないですか？」

「そうだな．．．あいつらも。もう用済みだからな。」

本部で影が動き出すとき、イザエルは、ロゼンについていた。

「ふう．．．ここがロゼンか。であれが。イーターの数？」

「どうやら、そのようです。」

俺は、最悪な思いだった。通り全てが足の踏み場もないくらいに。びっしり．．．

まるで、ゴキをかごいっばいにつめ過ぎて、毎日 ゴキの妙に輝く背中を見て目が覚め。

ゴキの妙に輝く背中を見ながら、三食をとり．．．もう考えるだけでも恐ろしい事だ。

俺は、全て切り殺したくなった。

「あゝもう！！ エメラルコピー！！！！アップドアタック開放！！  
うおおおおおお！！！！」

「待ってください．．．仕方ありません。ルビー制限解除！！」

俺は、ぴったりならんでるゴキ．．．いやいや。イーターに向かって、刺す構えをし。一気に走り

突っ込んでいった。見事、全て殺った。

一方．．．

「うううう．．．やはりゴキ．．．イーターは、苦手です。

クツ．．．離れて！！いああ！！今度は、そこ？  
だめです！！そこは、」

「．．．」

俺の目には、あいつがドMに見える。

やられっぱなしなのだ。

「遊んでんですか？」

イザエルの体が宙に浮き。低空飛行のような体制で。イーターに突

つ込む。

全て消える。まるで、さっきのが戯れていたとも言つように。

「ありがとうございます．．．私の夜はあなたに預けます」

「それ．．．どう言う意味ですか？」

それよりまだ居る」

そこに無線が入る。

「君達の目的は、あのビルの屋上だ。ブランデル撃墜を優先．．．」

「了解」

「了解しました」

そして、邪魔なイーターをなぎ払いながら、ビルによじ登り。

「下から．．．イーターが」

「ここは、上まで走りきるしかない」

「そ、そんなっ！！」

「ほらこい！！」

強引に引かれるフィレイナの手。

「えっ．．．その強引と言うか．．．聊か大胆と言うか．．．」

「つべこべ言うな。さっさと走れ」

「はい。」

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

上まで走り切るとそこに。黒い服に仮面をつけた男が立っていた。

「よく来たな．．．俺は、デビレイズ ブランデル

突然だがお前は、だまされている」

「いいから、さっさとかかって来い！！」

「だまされる？」

「フンっ．．．まあいい。まずは手合わせだ。話は、その後。

制限時間は、あいつらが上に上りきってくるまで．．．

それまでに俺を倒してみろ」

「言われなくても」

イザエルは、走り出す。ブランデルの懐めがけて。そして、剣を上  
に振り上げ、

力いっぱい振り下ろす。

「終わりだ．．」

「フン．．甘い。ブラックダイヤ．．」

「ブラックダイヤ．．避けてください！！」

「なに？うわあ！！」

剣を相手が振る。その瞬間、俺の今、立ってるすぐ足元から、刃が飛び出す。

「ち．．やるな」

「うわあああ！！」

フィレイナが横から、切り裂きに走る。が

「おっと．．」

早い．．風のように速く。その相手の剣は、鋼のように硬い。そして、イザエルが一旦後退し．．また切りかかる時だ。

「パリーン．．」

自分の手元から嫌な音．．

手元は、破片が刺さり血を流している。

エメラルが割れたのだ．．

二本とも．．

「なぜ．．ぐわっ！！」

素早く肩に傷をつけられる。

「遅いのだ．．お前もあの女もだ」

「私を甘く見ないでください．．」

「ほう．．」

フィレイナは、無我夢中で切りかかるが効果なし。

それを見ている。俺は、不思議に思った。

なぜなら．．デリーターが持つ原石．．鉱石は、命そのもの．．では、なぜ俺は、生きてる？

そのときだ、イザエルの手が青色に光る。

「なんだこれ？」

激しい光を放ったかと思うと、新しい剣が出てきた。

「あの力．．ダイヤモンド。選ばれた者にしか使えこなせないと言  
う．．だが使いすぎると、

存在自体が消えると言う禁断の力か」

「すぎあり．．」

「ぬっ！！はあ！！」

フィレイナが跳ね飛ばされる。そして、イザエルが青い光とともに  
突っ込む。

「ぢいあああ！！」

「ぬわ！！グっ．．足に傷？」

「さあ．．もう終わりか？こいよ」

「よくやったな貴様．．もう少し相手をしたいが。時間がない」

「にがさねえー！！」

切りかかるうとすると。そいつは消える

「また手合わせ願おう．．その時まで、勝負は預けた！！」

その後、本部に引き返す．．

「任務完了」

「そうかでは、もう用済みだな？」

イザエルに銃を向けたのは、デイレーンだった。

「てめえ！！やっぱ．．そんな気がしてたぜ．．逃げるぞ．．」

「はい」

「逃がすまい」

「うあっ！！」

「フィレイナ！！！！」

「お前は、用済みだがこいつは、必要だ。」

「なぜだ．．なぜそうまでして、フィレイナを」

「こいつにも。君と同じ力が宿っていてね。その力に目がくらんだ。  
だが。この子は、まだ覚醒していないその力を無理やり覚醒させ、  
私達の有能などづくにするのだよ

いい話だろ？」

「てめえ．．いつかぶっ殺す．．」

「やってみる。では、な？」

落とせ」

イザエルは、基地から落とされ。広い溪谷に下ろされた。

「フイレイナ．．必ず助け出す。俺のこの手で。その前にこいつらをかたずける」

大量のイーターがイザエルの周りを囲んだ。

一期 END．．

**最終章。 ロゼンゼリ ティレウインス 続 (後書き)**

信用して居たはずの仲間の裏切り。

力の覚醒・・・

失った仲間。

仮面

この四つが次の物語を作り上げる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2242z/>

---

イーターデリーター

2011年12月14日17時52分発行